

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2017/10/4	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原香鈴美

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)	
沖縄・那覇市・やんばる地域	
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
国内の文化・自然多様性保全のための活動の見学	
<b>3. 派遣期</b> (本邦出発から帰国まで)	
平成 29 年 9 月 28 日～10 月 1 日 (4 日間)	
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
野生動物研究センター、滝澤玲子	
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>本出張では、沖縄の生物文化多様性をテーマにしたシンポジウムに参加し、沖縄諸島の多様な自然との暮らし方について理解するとともに、これらを調査、保管、継承する活動に奉仕されている方々の具体的な話から、人と自然とが共存する形を再考することを目的とする。また研究地域を実際に訪れることで、自然の中の暮らしの歴史跡を目でみてその理解をより一層深いものとする。</p> <p>本シンポジウムは、京都大学野生動物研究センターに出向されている環境省職員の滝澤玲子氏によって開催された。9月29日午前、シンポジウム講演者のお一人である富田宏氏が勤務する漫湖水鳥・湿地センターを訪問した。那覇市内にあるこの湿地には、渡り鳥が多く訪れるためラムサール条約に登録されている。川の半分が埋め立てられ、橋が建設されたことで流速が減少し土砂の堆積が著しい。それでも干潟には多くのシオマネキやトビハゼが生息しており、それらをエサに渡りの水鳥が来ており、珍しいクロツラヘラサギなど生き物の多様性を感じた。ただこの干潟は車通りの激しい道路と隣り合わせで、水鳥たちのエサ場付近に十分な休息地がなかった。干潟の保全ではその流域だけでなく、そこにアクセス可能な安定した休息地をあわせて確保する必要があると気づいた。つまり、干潟ぎりぎりのところに人間の生活を置くのではなく、なだらかなグラデーションをつけて鳥と人との両者が使える陸地も用意しなくてはならないだろう。また、漫湖で実施されているマングローブの伐採という話は初耳だったため非常に驚いた。ゴミ溜めだった湿地の緑化のために植林されたが、人工物により川の流速が減少した状態では想定以上に種子が根を張り、土砂堆積に拍車がかかって干潟面積が縮小してしまったためである。マングローブの保存を目的に視察に訪れるインドネシアや東南アジアの人々も伐採の話には驚くという。その後、琉球大学のシンポジウム会場に移動した。高速道路から見える街並みにも沖縄の文化が色濃く出ており、例えば植生や家屋、墓地の違いは印象的で移動のあいまにも沖縄の風土を知ることができた。</p> <p>シンポジウム「島々の森と海の暮らし～人自然がつむぐ生物文化多様性～」は、自身にとって非常に刺激的であった。まず湯本貴和氏の生物文化多様性という大テーマの解説にはじまり、ヒトの暮らしの分化は生物的適応でありこれらがそれぞれの文化となること、また生物多様性という”種”が文化多様性の”言語”であり、それらの相互理解が多様性の存続につながるという説明は非常に理解しやすくすんなりと胸に落ちた。次の講演者の盛口満氏は沖縄大学に所属しながら、理科の教員や著者としてもご活躍されていて、研究成果はもちろん、話術や言い回しがすごく勉強になった。3人目の講演者の当山昌直氏は、沖縄出身でその方言での語り口調が各島々の風景をより強く描かせてくれた。圧倒的な知識の泉から湧き出す高島、低島の島利用のようすは初めて知ることも多く、自身の調査地である伊豆諸島の島々とも比較をしながら話に耳を傾けた。3題の公演後、セクションが変わり研究成果や活動報告ということで、滝澤玲子氏、三輪大介氏、富田</p>	

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

宏氏、高橋そよ氏による発表がおこなわれた。印象的だったのは三輪氏の池間島での活動報告で、文化を継承する通称“よみがえりの種”を様々なフェーズでしかけることで、新たな文化形成の中に消えゆく文化や先人の想いを埋め戻していく取り組みに感動した。平均 80 歳の民泊事業や池間島学校のイベント、こよみカレンダーなど町おこしのトレンドに、さらに文化の継承というキーワードを加えた事業は、今後さまざまな地域のモデルケースになることが期待される。パネルディスカッションでは湯本氏によるファシリテーターのロールモデルを間近にみる事ができた。会場から集めた質問票をもとに話を展開していくようすはまさに圧巻であった。その後の懇親会でも多くの人と交流することができ、自身の調査地である東京都御蔵島の住民を知る方にも出会えた。島嶼に共通点、違う点を理解し、それぞれの地域が自然と共に作り出した文化を大切にしたいと感じた。

30 日は滝澤さんが調査をおこなっているやんばる地方（奥）の現地報告会、ならびに自然観察会に参加した。シンポジウムの中で出てきた自然の中の文化の跡を森の中でみつけ、また一緒に散策した現地の方がその場で当時のようすを解説してくださることで、その文化の厚みを感じた。観察会終了後は、やんばる野生生物保護センターのウフギー自然館、やんばるクイナの展示施設である安田くいなふれあい公園などで固有の生きものについて学んだ。夜は国頭村の役所の方や自然協議会職員、地域の NPO 法人の方々など幅広い所属の方々が一堂に会し、それぞれの立場からみた問題点やその立場を使っての働きかけなどを具体的に知ることができた。ひとつの地域にさまざまなコミュニティが存在する中で、どのようにことを進めるか学ぶに良い場であった。

10 月 1 日はやんばるの住民の山中の畑を訪問し、パッションフルーツやリュウキュウイノシシの狩り場などを見せていただいた。最後に国営沖縄記念公園を訪れ、国内で唯一自身の研究対象であるミナミハンドウイルカが飼育されているプールのようすを初めて訪れた。

今回、滝澤さんが調査・研究対象となった地域で報告会を開いているようすを目の当たりにし、自身も調査地への研究成果の還元を率先しておこなわなければならないと強く感じた。11 月、もしくは年度末の 3 月をめどに開催できるよう準備を進めていきたい。



漫湖干潟のクロツラヘラサギ



奥の自然観察会で解説する滝澤さん

### 6. その他 (特記事項など)

本シンポジウムへのお誘いいただいた滝澤玲子氏をはじめ、貴重なお話をしてくださった講演者、地域の方々には心より感謝いたします。道中一緒に意見を交換しあった PWS 支援室の秋山さん、左海さんにも、大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。